

ミュージアム・コンサート

美術と音楽～米元響子 (ヴァイオリン)

曲目解説

フォーレ:ヴァイオリン・ソナタ 第1番

30歳を過ぎたフォーレが、歌曲・ピアノ曲以外の分野に初めて着手した作品。初演は1877年、マリー・タヨーのヴァイオリンと作曲者自身のピアノで行なわれ、サン＝サーンスに激賞された。

4楽章からなり、隅々まで若い情熱がみなぎる第1楽章、舟歌のように心地よく揺れるリズムに甘美な旋律が乗る第2楽章、そして気まぐれな表情で軽やかに駆け抜けるスケルツォ楽章では、ほんのりとスペイン風の旋律が香る。ロンド形式の終楽章は、主題の素朴な優美さに冒頭から心を掴まれ、最後は軽快なスタッカートで華やかに曲を閉じる。

ショーン:詩曲

44歳で自転車事故に見舞われて早逝したショーンの代表作。ヴァイオリンとオーケストラのための作品で、ショーンの死の3年前、1896年に書かれた。ベルギーのヴァイオリニスト、イザイに献呈されており、翌年のパリ初演もイザイによって行なわれた。

ほの暗い熱を帯びた感情が、時に激しくほとぼしり、時に神秘的な瞑想に浸るようで、それはフランス音楽においてもショーン独特の世界と言える。

ラヴェル:ヴァイオリン・ソナタ

1923年に着手されたが、完成には4年を要した。初演は1927年、ジョルジュ・エネスコのヴァイオリンとラヴェルのピアノによって行なわれた。なお、本曲を献呈されたのは、女性ヴァイオリン奏者のエレヌ・ジュルダン＝モランジュ(彼女はもともと初演者に予定されていたが、病を患ってその任を果たせなかった)。

不思議な透明感に満たされる第1楽章、ジャズへの関心が表れた第2楽章、そして第3楽章では、ヴァイオリンが息をつく間もなく軽やかに躍動する。